

第四十節の隠された歴史 — 第十七番 संख्या

第二の災い—第四部

Jeff Pippenger

2026-06-25

627、632、および637

底なしの穴を開く「鍵」とは、ニネベの戦いであり、それはムハンマドが632年に死去する五年前の627年に成就した。さらにその五年後の637年、イスラム軍は、ニネベの戦いに関与した二大超大国の一つであるペルシアの首都を攻略した。この出来事は、中東における勢力均衡を劇的に変化させた。627年のニネベの戦いはペルシア帝国の力を奪い、その十年後、ペルシア帝国は終焉を迎えた。

屈辱—782

ムハンマドの死去した632年から百五十年後、782年のアッバース朝遠征において、アッバース朝軍（伝えられるところでは約九万五千人）は、小アジア（現代のトルコ）にあるビザンツ領内へ大規模な侵攻を開始した。彼らは、コンスタンティノーブルの対岸、ボスポラス海峡を隔てて直接向かい合うクリュソポリスにまで進軍し、ビザンツの首都にきわめて接近した。皇后イレネーのもとにあったビザンツ軍は重大な敗北を被った。その結果、ビザンツ側は屈辱的な三年停戦協定への署名を強いられ、多額の年貢納金（約七万～九万金ディナール）を支払い、さらに絹の衣服と人質を引き渡すことに同意した。この遠征は、八世紀におけるアッバース朝によるビザンツ領侵入の中でも最大級かつ最も成功したものの一つであった。それは、アッバース朝カリフ国の増大しつつある力と、ビザンツ帝国の継続的な衰退とを示すものであった。

五か月

黙示録第九章において、「五か月」すなわち百五十年に相当する期間が二度言及されている。すなわち、一度は第五節において、もう一度は第十節においてである。

彼らには、人々を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。彼らの苦痛は、さそりが人を刺すときの苦痛のようであった。その時代には、人々は死を求めてもこれを見いだせず、死にたいと願っても、死は彼らから逃げ去るのである。また、いなごの姿は戦いのために整えられた馬に似ており、その頭には金に似た冠のようなものがあり、その顔は人の顔のようであった。また、女の髪のような髪を持ち、その歯は獅子の歯のようであった。また、鉄の胸当てのような胸当てを着けており、その翼の音は、戦いに駆けて行く多くの馬に引かれた戦車の響きのようであった。また、さそりのような尾を持ち、その尾には針があった。そして、彼らの力は、人々を五か月の間害することになった。黙示録 9:5-10。

黙示録第九章の第五のラッパには、百五十年から成る二つの明確に異なる預言期間がある。第一は、西暦632年のムハンマドの死から、782年の東ローマの女帝イレネーの屈辱に至るまでである。第九章は、イスラムの興隆をきわめて詳細に示している。606年の諸部

族の統一から、627年のニネベの戦い、632年のムハンマドの死、さらに637年のペルシアの敗北に至るまで、イスラムの興亡は神の預言の御言葉の中に注意深く描き出されている。最初の百五十年の苦悩の預言における勢力は、アラビアのイスラムである。606年におけるムハンマドによる諸部族の統一、次いで627年の「鍵」となるニネベの戦い、それに続く628年ごろのペルシアとローマ両帝国の滅亡についてのムハンマドの預言、そして632年の彼の死へと至る。これらの年代は、イスラムの系譜における特定の出来事の連続を示している。

ムハンマドが632年に死去してから百五十年後、イスラムの勢力基盤はアラビアからトルコへと移り、東ローマをコンスタンティノープルに至るまで後退させた。第一の災いはアラビアのイスラムを表し、第二の災いはトルコのイスラムを表した。第一の災いの中にある二つの百五十年の時の預言は、第一の災いと第二の災いの区別の中に同じ真理が示されているのと同様に、アラビアのイスラムとトルコのイスラムとの区別を明らかにしている。

最初の百五十年は、ペルシアの滅亡をもって始まり、ローマがコンスタンティノープルの城壁内に閉じ込められることをもって終わった。第二の百五十年の期間は、オスマン（オットマンとも呼ばれる）のニコメディアにおける勝利をもって始まった。オスマン朝のニコメディアにおける勝利とは、1333年から1337年にかけて起こったニコメディア包囲戦（現在のトルコ、イズミット）を指す。このとき、オスマン侯国の創設者オスマン1世の子であるスルタン・オルハン・ガズィが、ビザンツ帝国の重要都市ニコメディアを包囲した。同市は数年にわたって持ちこたえたが、最終的には飢餓と補給の欠乏のために1337年に降伏した。ビザンツ守備隊には、コンスタンティノープルへ退去することが許された。ニコメディアは、小アジア（アナトリア）におけるビザンツ帝国最後期の主要な拠点の一つであった。その陥落は、ビザンツ帝国によるアナトリア西部の大部分に対する支配を事実上終焉させた。この勝利により、オスマン朝はビテュニアにおける支配を強化し、さらにボスポラス海峡へ向かって拡張することが可能となった。それは、最終的なオスマン朝によるコンスタンティノープル征服（それは一世紀以上後の1453年に起こった）へと至る重要な足がかりであった。この包囲戦はしばしば、小規模なオスマン侯国を台頭する地域大国へと変貌させた初期の鍵となる勝利の一つと見なされている。

第一のラッパのうちにある第二の百五十年の期間が1449年7月27日に終結したとき、最後のコンスタンティヌスは東ローマの王位に即くためにイスラムのスルタンの許可を求め、それによって、黙示録第九章の二つの「五か月」の期間の最初の百五十年の終わりに皇后イレネーが被ったのと同じ屈辱を被った。『皇后イレネー』の屈辱、また『最後のコンスタンティヌス』の屈辱は、後にオスマン帝国が、第二の災いの時の預言の終結に際し、エジプトの脅威からの保護を求めてヨーロッパの四大列強に依拠したときに受けた屈辱を、予型的に示していた。

パンテオン

先駆者たちは、ダニエル書八章十一節の「その聖所の場所は投げ倒された」という句が、コンスタンティヌスによって成就したことを、正しく理解し、また教えていた。

まことに、彼は自らを高くして軍勢の君にまで及び、彼によって日々の犠牲が取り去られ、その聖所の場所は投げ倒された。

ここで「聖所」とされているのはローマ市のパンテオン神殿であり、その神殿の「場所」はローマであった。ローマは、コンスタンティヌスが西暦330年に帝国の首都をコンスタンティノープルへ移すことを選んだとき、「投げ倒され」たのである。第十一節は黙示録十三章と結びついており、第二節は同じ出来事を指し示している。

私が見たその獣は豹のようであり、その足は熊の足のようであり、その口は獅子の口のようにであった。すると、竜は彼に自らの力とその座、そして大いなる権威を与えた。

竜は異教ローマであり、異教ローマは西暦330年、首都を東方へ移したとき、その権威の「座」をローマ教会に明け渡した。こうして生じた権力の空白を、教皇制教会は喜んで利用したのである。東ローマの期間を西暦330年から1453年までとすると、東ローマに関するこの預言の冒頭において、ローマの都はコンスタンティヌスによるローマ拒絶によって辱めを受けていることがわかる。その辱めは、苦痛の最初の百五十年の終結にあたる782年、女帝イレネーによって繰り返された。これら二つの辱めは、いずれも最後のコンスタンティヌスによって繰り返された。

特異な興亡

黙示録第九章の第五および第六のラツパは、東ローマの没落の詳細を示すと同時に、イスラムの興隆と衰亡をも記録している。靈感は、ダニエル書および黙示録における王国の「興隆と衰亡」を研究するよう、私たちに告げている。それらの王国は、それぞれ特有の「興隆と衰亡」に伴う独自の特徴を有している。ユダの滅亡は、エルサレムに対する三度の攻撃によってもたらされた。ヘブル人はバビロンへ連れ去られ、その後、三つの勅令の下に帰還することになるが、それらは、1798年から1844年に至るまでの歴史の中に三天使が到来するに至った二千三百年を開始するものであった。バビロンは一夜にして倒れた。ローマは解体し、その解体の中で、ローマの二つの局面が、西ローマまたは東ローマという位置づけの下に示された。ダニエル書第十一章の前半三分の一におけるプトレマイオス帝国とセレウコス帝国の興隆と衰亡は、教皇制ローマの興隆と衰亡を予表している。その証言は、単にアレクサンドロスとギリシアの分裂の物語の結論にほかならない。ローマとは異なり、ギリシアは四つに分かれ、最終的には二つとなった。ローマは東西に分かれ、その後、西ローマは預言的に三つに分割され、ローマの三重の統治を表している。東ローマについては、コンスタンティヌスが自らの王国を三人の息子たちに分け与えた。明らかに、西ローマと東ローマは、ローマ教会とローマ国家を表す平行線である。その二重の分割には、さらに三重の分割が伴っている。ギリシアは四から二へ、バビロンは一夜、ユダは三度の攻撃であった。イスラムにおいては、その「興隆」は「解放」として描かれ、その「衰亡」は「抑制」である。

彼らの台頭はムハンマドとともに始まり、1840年8月11日に抑制された。彼らは解き放たれ、そして9/11において直ちに再び抑制された。彼らは最近、2023年10月7日に解き放たれ、それ以来ガザにおいて抑制されている。獣の像の設置を画するために、イスラムは再び解き放たれるであろう。黙示録第九章から第十一章に表されているイスラムの預言的歴史の線は、第三の禍としてのイスラムの預言的歴史を明らかにしている。「第三の禍とし

てのイスラムの預言的歴史」は、第七の天使によって、また第三の天使によっても表されている。第三の天使は、第七の天使が吹き鳴らし始めた1844年10月22日に到来した。第三の天使と第三の禍とは、9/11において預言的歴史の中へ到来した。9/11から日曜法に至るまで、第一および第二の禍の預言的歴史は繰り返されてきており、今なお繰り返されつつある。

ニネベの戦いの「鍵」は、ローマとペルシアという二つの勢力を、イスラムと直接かつ不可分の関係へと引き入れる。ニネベは、聖書の他のいかなる箇所にもまして、西方ローマと東方ローマの双方の漸進的な衰亡を、より明確に示している。

ヘロデは竜の象徴であり、彼はローマを代表していた。世の終わりにおけるその竜は国際連合である。日曜律法の時に第六の王国は倒れ、第七が始まるが、彼らは自らの誕生日の宴において、その王国を第八の王国に引き渡す。第七の王国はたった今生まれたばかりであり、しかも直ちに、自らの王国を一時の間バビロンの淫婦に与えることに同意する。それは、ヘロデがサロメに自分の王国の半分まで与えると約束したことによって予表されている。

ちょうどアメリカ合衆国が倒れるその場所で、国際連合が誕生し、三重の合同が実施される。ヘロデは竜であり、ヘロデヤは教皇制であり、アメリカ合衆国はサロメである。ヘロデは不法な婚姻同盟の中にあつた。なぜなら、彼は自分の兄弟の妻と結婚していたからである。そして預言的次元において、彼はサロメと近親相姦的關係にあつた。というのも、サロメが踊るとき、彼が彼女に欲情していたことは明らかだからである。竜は母と娘の双方と関係を持つ。西ローマと東ローマがそれぞれ教會的策謀と国家的策謀を表すと見定めるとき、このことを理解するのは重要である。聖書預言の第四の王国であるローマは、預言的に教皇制を王座に就かせた。そしてそのことによって、再び教皇制を王座に就かせることになるアメリカ合衆国を予表したのである。

西ローマが330年から476年に至るまで漸進的に滅亡したことは、1798年から日曜法に至るまでの合衆国の漸進的な滅亡を表している。330年と1798年は、ともにダニエル書において「定めの時」または「終わりの時」と呼ばれる預言的標識である。330年は西ローマと東ローマの始まりを画する。両者の終焉は、初めにコンスタンティヌスがローマの町を辱めたのと同様に、ローマの指導者の屈辱である。476年は、ローマの威光ある政治構造が三つの段階を経て崩壊したことを示す預言的期間の終わりであつた。その期間は、330年に都市が退けられることによって始まり、続いて彼らの政治構造全体——古代ローマにとって最大の誇示点であつた栄光ある共和国——が解体され、ついには476年に至って、もはや実際のローマ人の血統に属する支配者がローマを治めることはなくなった。330年に始まるローマの二つの系統、そしてそれら二つの系統が提示されている箇所には、五か月から成る二つの預言的系統もまた含まれている。西ローマの系統は、漸進的な屈辱をもって始まり、漸進的な屈辱をもって終わる。東ローマの系統もまた、1449年に、最後のコンスタンティヌスが統治する許可を求めたとき、漸進的な屈辱をもって始まり、漸進的な屈辱をもって終わる。

五か月の期間の一つは、預言の焦点としてのアラビア・イスラムの終焉と、782年におけるトルコ・イスラムの始まりへと導く。その時点において、女帝イレネーは辱めを受け

るが、それは第二の五か月の預言の終わりにおける最後のコンスタンティヌスの辱めと一致している。十五節から成る一つの物語の中に、二つの五か月の預言がある。一つはアラビアのイスラムの歴史を描き、もう一つはトルコのイスラムを描く。いずれも東ローマの辱めをもって結末を迎える。一方の預言の結末は、一人の女が辱められることによって成就し、他方は一人の男によって成就した。行の上に行を重ねるように、それらは東ローマの教会と国家の辱めを示している。両方の辱めは、第一の災いのイスラムによってもたらされる。1449年における最後のコンスタンティヌスの辱めは、1453年に終わる四年間の期間の始まりであり、そのときコンスタンティノープルの城壁は崩れ落ちる。1449年は辱めを表し、1453年には城壁が崩れ落ち、一つの王国が終焉を迎える。

ムハンマドの死

二つの五か月の期間のうち一つは、ムハンマドの死をもって始まる。ムハンマドは、第十一節において「彼らを治める王」として示されている。

彼らは自分たちの上に王をいただいていた。その者は底知れぬ所の御使いであり、その名はヘブル語でアバドンと言い、ギリシア語ではアポリュオンという名を持つ。

彼らの上に立つ王はムハンマドであった。というのも、彼は第一節において特定されているのであり、したがって彼は他のいかなるイスラムの人物でもない。彼は王としてのムハンマドであり、王は一つの王国であって、イスラムはムハンマドの王国なのである。

第五の御使いがラッパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。そしてその者に、底知れぬ淵の鍵が与えられた。彼がその底知れぬ淵を開くと、大きな炉の煙のような煙が淵から立ち上った。その淵の煙のゆえに、太陽も空気も暗くなった。また、その煙の中から地上に、いなごが出て来た。そしてそのものどもには、地のさそりが持つような力が与えられた。黙示録 9:1-3

第三の災いの中に第一と第二の災いが反復されていることは、第三の天使の中に第一と第二の天使が反復されていることと並行している。王であるモハメッドには底知れぬ穴を開く鍵が与えられ、そして9/11は、第三の天使が力を与えられる時を特定する。そうして、力ある天使としてのキリストは、バラムの第一の打撃が預言的歴史に到来した時に降って来られた。次いで底知れぬ穴が開かれ、イスラムは再び世界史の主題となった。さらにキリストは、その民をエレミヤの古い道へと導き戻され、第三の災いと第三の天使のメッセージが鳴り響き始めた。2015年、トランプは大統領選に出馬する意向を表明し、それによってグローバリストの竜の勢力をかき立て、そして底知れぬ穴は、最終的にソドムとエジプトの町中でトランプを殺した無神論を解き放った。日曜法の時、その七つのうちの一つでありながら第八である獣は、底知れぬ穴から上って来るであろう。十四万四千人の封印の時の始まりとその終わりは、底知れぬ穴の勢力の興起を示している。

あなたが見たあの獣は、かつて存在したが、今はいない。しかし、底知れぬ所から上って来て、ついには滅びに至るのである。地に住む者たち、すなわち、世の初めからののちの書にその名を記されていない者たちは、その獣が、かつて存在し、今はないが、なお存在するのを見て驚嘆するであろう。黙示録 17:8

イスラムは、9・11において底知れぬ穴を開いた鍵であり、また日曜法の時に底知れぬ穴を開く鍵でもある。封印の時のただ中であって、グローバリズムの竜獣もまた底知れぬ穴から出て来た。

そして、彼らとその証言を終えたとき、底知れぬ所から上って来る獣は彼らに戦いを挑み、彼らに打ち勝ち、そして彼らを殺すであろう。黙示録 11:7.

底知れぬ穴から出る一つの勢力の三つの道標すべてを開く鍵は、イスラムの王国の王ムハンマドに与えられた。627年のニネベの戦いは、二つの勢力の間の戦いを表しており、その戦闘は両方の交戦者の力を消耗させ、そのことによってイスラムが急速に権力の座へと台頭することを可能にした。その鍵は9/11に回され、イスラムの興隆が始まったが、その後まもなく抑制された。ニネベの戦いは9/11において予表されていた。というのは、そこでイスラムの興隆が始まったとき、力ある御使いがその栄光をもって地を照らすために降り、また、使者を意味する星も天から落ちたからである。ニネベの戦いはまた終末においても予表される。すなわち、日曜法が到来し、イスラム教という宗教の煙が太陽を覆い隠すとき、暗黒時代の第二の期間が始まるのである。

エクセター

日曜法は、真夜中の叫びのメッセージがエクセターのキャンプ集会に到来する時に予表される。こうして、獣の像の設立における最後の動きが始まる。像の形成、すなわちその設立は9/11に始まったのであるが、その期間の終わり——すなわち真夜中の叫びの宣言の期間——もまた、9/11に始まった像の形成の全期間のフラクタルである。始まりは終わりを表象する。第一の災いが第三の災いを予表するのと同様に、第一の天使は第三の天使を予表する。封印の時の終わりにおけるニネベの戦いは、始めにおけるニネベの戦いを明らかにする。日曜法におけるニネベの戦いは、9/11に始まった封印の時の終わりであるが、同時に、それは真夜中の叫びの宣言の期間の終わりでもある。したがってニネベの戦いは、真夜中の叫びの宣言に至るその初めにおいて予表されており、それは合衆国における獣の像の形成の最終段階を明らかにする。そして日曜法において、世界における獣の像の形成の始まりが始まる。ニネベは、諸々の線を整合させる鍵であり、それらの線は第四十節の隠された歴史において完全な成就を見いだすのである。

次の記事において、さらに先へ進むことにする。